

氷の男シリーズ 第七作

氷の支配人は番を作らない

～跪かせる側のあの人が、「欲しい」と懇願するまで～

「君が、欲しい。——命令でも、契約でもなく」

薬の効かないΩのわたしと、本能を檻に入れた完璧な支配人。
九回落とされた入会審査。十回目、彼は担当欄に自分の名前を書いた。
跪かせる側のあの人が、跪いて「欲しい」と懇願するまで。



TL小説 / オメガバース / 執着 / 現代

R-18

【ご注意】

- ・ 本作品はフィクションです。実在の人物・団体・出来事とは一切関係ありません。
- ・ 本作品には成人向けの性的表現が含まれます。18歳未満の方の閲覧はできません。
- ・ 表紙・挿画にはAIを一部利用しています。本文はすべて著者が執筆しています。
- ・ 無断転載・無断複製を禁じます。
- ・ 本書は体験版です。冒頭のみを収録しています。

目 次

1 十回目の申込

2 檻の作法

3 九回の理由

4 波

5 檻の外

6 十年前の咬み痕

7 檻を叩く

8 二年前の夜

9 波の夜

10 手放す

11 懇願

12 檻のない部屋

十回目の申込

「——十回目ですね、桜庭様」

受付の声に、嫌味はなかった。事実の確認だけがあった。

会員制サロン〈カーージュ〉。

薬に頼らず、 Ω の本能を「訓練」で制御する、都内でここだけの場所。紹介制で、審査があって、そして、わたしは九回落ちている。

理由は、一度も開示されなかった。

わたし、桜庭栞、二十五歳。食品メーカーの経理部で働く、戸籍どおりの Ω 。

周期が読めない体質で、抑制剤は年々効きが鈍くなっている。会社で隠しごととはしていないけれど、言っていないことがひとつだけある。——半年前、社内で波が来かけた。給湯室で膝をついて、スカーフの下のうなじが内側から熱を持って、あと五分遅かったら、と思うと今でも指先が冷たくなる。

薬を増やす道は、医者に止められた。これ以上は腺が保たない、と。

だから、ここしかなかった。薬でも、根性でもなく、「命令と服従」で Ω の本能を飼い馴らすという、半分都市伝説みたいなこの場所しか。

十回目の今日、通された部屋は、これまでの面談室ではなかった。

黒い扉。分厚い絨毯。窓のない、静かな部屋。

その中央に、男が立っていた。

「久遠と申します。当サロンの、支配人です」

背の高い男だった。三つ揃いのスーツに、銀の腕時計。年は三十半ば。声に、体温がなかった。低くて、正確で、こちらの内側まで測ってくるような声。

「本日より、あなたの担当を、私が務めます」

「……支配人が、直々に、ですか」

「ご不満でしたら、十一回目の抽選をお待ちいただいても」

「受けます」

即答した。九回落ちた人間に、選ぶ権利はない。

久遠は頷いて、一枚の契約書を、テーブルの上を滑らせた。

規約は、簡潔だった。

サロン内でのみの関係であること。外で会っても他人であること。感情の持ち込みは禁止。素肌の接触は段階制。中断の言葉は「檻」。そして最後の一行に、太い字でこうあった。

——いかなる場合も、番行為（項部への咬傷）は行わない。

「これだけ、罰則が重いんですね」

「当然です」

久遠は、初めてわたしの目を見た。

「私は、番を作らない。作らせない。それが、この檻の唯一の掟です」

檻の作法

最初のセッションに、性的なことは何もなかった。

「跪いて」

命じられて、絨毯の上に膝をつく。それだけだった。

「呼吸を数えて。四つで吸って、四つ止めて、八つで吐く」

声に従う。従うと、不思議なことが起きた。ざわついていた体の内側が、静かになっていく。ヒートの前触れでいつも荒れる呼吸が、あの人の声の枠に、収まっていく。

部屋には、時計がなかった。

代わりに、メトロノームがひとつ、柵に置いてあった。振り子は止まっている。「必要になったら使います」と、あの人は言った。呼吸が数えられなくなる夜が、Ωには来るから、と。

命令の声は、いつも同じ高さから降ってくる。近づきも、離れもしない。三步ぶんの距離。それが最初の契約の、素肌より遠い距離だった。

「Ωの本能は、消せません」

久遠の声が、頭の上から降ってくる。

「消せないものは、檻に入れる。命令と服従は、そのための枠です。薬は波を殺すが、枠は波を、飼い馴らす」

わたしは、二十五年間、薬で波を殺してきた。

殺しても殺しても、波は来た。職場で、電車で、真夜中に。増やした薬で胃を壊して、それでも来る波に、いつも負けそうだった。

だからここに来た。九回、断られても。

「上手だ」

ふいに、声の温度が、半度だけ上がった。

たったそれだけで、背中が痺れた。

命令に従って、認められる。それだけのことが、こんなに、体に効くなんて。

「続けます。……そのまま、膝立ちに」

絨毯の上で、膝を起こす。三步先の革靴は、動かない。今日はまだ、一度も触れられていない。最初の日から、一度も。

「目を伏せて。私の靴の先だけを、見る」

視界が、狭くなる。声の出どころが見えなくなると、声は、耳からじゃなく、皮膚から入ってくるようになった。

「膝を、拳ひとつぶん、開く」

「……っ」

「聞こえませんでしたか」

「……開き、ました」

スカートの中の膝を、拳ひとつぶん。誰にも見えない。この部屋には二人しかなくて、あの人は三步向こうから動きもしない。なのに、開いた、という事実だけで、脚の付け根に、熱が点った。

「閉じて」

閉じる。

「開いて」

開く。閉じるより、開くほうが、従順さが要る。それを知っていて、この人は命じている。

「呼吸が浅い。数え直し。四つ、止めて、八つ」

数える。数えるほど、体の表面は静かになって、静かになった底のほうで、静かじゃないものが、熱を上げていく。

「顔を上げて。私を見る」

目が合う。灰色の、温度のない目。その目が、わたしの喉から胸元へ、検分みたいに降りて、戻る。

「脈が、上がっていますね」

「……はい」

「怖い？」

「……いいえ」

「では、なぜ」

答えられなかった。答えは、もう、下着の内側にあった。命令されて、従って、認められる。その往復のたびに、脚の奥が潤んでいくのが、自分でわかっていた。触れられていない。指一本、届いていない。声だけで、わたしは、濡れている。

それが、恥ずかしくて。

恥ずかしいのに——次の命令を、待っている。

「最後に、ひとつ」

声が、半度だけ、低くなった。

「体に起きていることを、隠さないこと。報告は要りません。隠さない。それだけです」

知られている。

三歩の距離から、この人は、全部、見ている。

「返事は」

「……はい」

「——よく、できました」

その六文字が、今日いちばん、深いところに届いた。

セッションが終わると、久遠は何事もなかったように、手帳に何かを記した。

「次回は三日後に。……よく、できました」

その一言を、家に帰ってからも、何度も思い出した。
思い出すたび、胸の奥が、変な音を立てた。

感情の持ち込みは、禁止。

契約書の一行を、わたしは頭の中で、三回なぞった。

九回の理由

「桜庭さんの担当、支配人なんだって？」

サロンの待合で、顔見知りになった会員の子が、目を丸くした。

「久遠さん、担当持たない人だよ。もう何年も。教える側の、そのまた上の人。……というか、あなた、九回落ちたって言ってたよね」

「うん」

「うちの審査、落ちる人ほとんどいないよ。書類と健康診断だけだもん」

初めて、聞いた。

「担当の割り振りも、抽選って建前だけど、最後は支配人の決裁。——つまりあなた、九回、あの人に断られて、十回目にあの人が自分で取ったの」

意味が、わからなかった。

九回、断った人が、十回目に、自分で。

帰り道、九回ぶんの不合格通知を思い出した。定型文の、体温のない三行。あれを九回、あの人は自分の指で送っていたことになる。

断られるたび、わたしは申込書を書き直した。志望動機を変え、診断書を新しくして、写真まで撮り直した。滑稽だ。落としていた本人が、十回目に、黙って担当欄へ自分の名前を書くなんて。

……どうして、と考えかけて、やめた。考えると、契約書のあの一行——感情の持ち込みは禁止——が、遠くなる気がした。

次のセッションで、訊いた。

「わたしを九回落としたのは、あなたですか」

久遠の手が、一瞬だけ、止まった。

ページをめくる、その途中で。

「……審査基準は、非公開です」

「答えになってません」

「答える契約も、していません」

声は、いつもどおり正確だった。

でも、わたしはもう知っていた。この人の「正確」が、半度だけ揺れる瞬間があることを。

いまのが、それだった。

波

四回目のセッションの途中で、波が来た。

予定より、十日も早かった。ヒートの前触れ。体の芯が疼いて、呼吸の枠が、内側から壊れていく。

「……すみません、今日は、帰りま」

「跪いて」

声が、被さった。

「呼吸。四つ、止めて、八つ。——私を見て」

命令の枠が、波に、上から被さっていく。

久遠は椅子から立って、わたしの前に片膝をついた。手袋をした指が、顎を持ち上げる。目が合う。灰色がかった、静かな目。

「波は、敵ではない。数えなさい。波の間隔を。私の声で」

言われるまま、数えた。

波は消えなかった。でも、溺れなかった。あの人の声が、浮き輪みたいに、わたしを水面に留めていた。

「処置に移ります。服の上からのみ、触れます。……同意を」

「し、ます……」

「言葉が崩れたら、中断します。中断の言葉は」

「……『檻』」

「結構」

手袋の指が、うなじの、髪の生え際に置かれた。

革一枚。それだけの隔たりで、人の指が、初めて腺のそばに触れている。
二ヶ月、声だけだった人の指が。

「熱いですね。腺が張っている。……波の頭が来たら、声に出して、一、と
数えなさい」

指が、うなじの輪郭を辿る。右。左。ゆっくり、測るように。

「ん……っ、一……」

波の頭が来る。腰の奥から突き上げる疼き。いつもなら、ここで溺れる。
でも今日は、数えろと言われている。数える、というたった一本の柱が、波
の中に立っている。

「よくできました。次が来るまで、呼吸」

手袋の指が、背骨を下りていく。ブラウスの上から、骨をひとつずつ確か
めるように。触れられた場所から、熱が皮膚の下に溜まっていく。

「に……っ」

「間隔は」

「みじかく……なって、ます……」

「なら、頂点が近い。怖がらない。波は、上がりきれば、必ず下りる」

腰の窪みに、手のひらが当てられた。服越し、手袋越し。なのに、そこから体の芯まで、まっすぐ響いた。お腹の奥が、きゅう、と締まって、愛液が溢れていくのが自分でわかる。下着はもう、役に立っていなかった。

「あ……っ、くおん、さん、わたし、へん……」

「変ではない。正常な波です。……三つ数えたら、いちばん高いところに出る。そこで、止まろうとしないこと。越えなさい」

「こわい……」

「私の声が、あります」

断言だった。

「一」

うなじの指が、腺の際を、円を描いて押した。

「二」

腰の手のひらが、背骨の下端を、ゆっくり撫で上げた。体中の熱が、一点に集まる。触れられてもいない脚の間で、花芯が、痛いくらいに膨らんでいる。

「――三。越えなさい」

声が、背中を押した。

波の頂点で、わたしは、達した。

服の上から、うなじと腰に手袋の指を置かただけで。撫でられてさえいない場所が、何もない空気を締めつけて、びく、びく、と痙攣する。声にならない声が、喉から漏れた。

……その、いちばん高いところで。

うなじの指が、一瞬、迷った。

円を描いていた指先が、軌道を外れて、腺の中心へ、半ミリ、寄った。押すのでも、撫でるのでもなく、ただ、寄った。まるで、口づける場所を、探すみたいに。

一瞬だった。

指はすぐに正確さを取り戻して、離れた。手のひらも、離れた。三步ぶんの距離が、戻ってくる。

「……呼吸。四つ、止めて、八つ」

声は、いつもの高さだった。

でも、わたしは聞いてしまった。数えるその声の、最初の一音が、ほんの少し、掠れていたのを。

波が、引いていく。

引いた砂浜みたいに静かになった体の真ん中に、達した余韻と、あの半ミリの迷いだけが、残っていた。

波が引いたあと、久遠は手袋を、外さないまま言った。

「……薬の量を、記録に。今日は、送迎を付けます」

「大丈夫です、ひとりで」

「命令です」

それは、セッションの外の言葉だった。

契約の枠の、外側から出た声だった。本人が、気づいているかは、わからない。

帰りの車の中で、わたしは自分の指を見た。

あの人の指は、波のいちばん高いところで、一瞬だけ、迷った。

完璧な支配人の指が、迷った。

それを見てしまったことを、わたしは、誰にも言えない。

迷い、という言葉を、あの人の辞書から探しても、たぶん載っていない。載っていないものを、わたしは見た。

それは秘密というより、預かりものに近かった。落とし主に返す日まで、誰にも見せてはいけない類の。

檻の外

偶然だった。

日曜の昼、書店の文庫の棚で、久遠玲に会った。

スーツじゃなかった。灰色のニットに、眼鏡。手袋も、していない。文庫を三冊抱えて、値札を見て少し眉を寄せている、ただの男の人だった。

「……久遠、さん」

呼んでから、契約書の一行を思い出した。外で会っても、他人であること。

久遠は、わたしを見て、二秒、黙った。

それから、小さく頭を下げて、他人の顔で、通り過ぎようとした。

「その本」

気づいたら、声が出ていた。

「わたしも、持ってます。……最後、泣きますよ」

久遠の足が、止まった。

長い沈黙のあと、彼は振り返らずに、言った。

「……結末を言うのは、規約違反です」

「そんな規約、ないです」

「今、作りました」

それだけ言って、彼はレジに歩いていった。

耳が、少しだけ赤かった。

レジに並ぶ背中を、見るともなく見た。

スーツを脱いだけで、あの人は五つくらい若く見えた。文庫を三冊まとめて買う人。眼鏡を押し上げる癖のある人。日曜の書店で、結末を知りたくない人。

檻の中のあの人しか、わたしは知らなかった。知らないままにすることが、契約だった。

わたしは柵の前に立ったまま、しばらく動けなかった。

感情の持ち込みは、禁止。禁止。禁止。——三回なぞっても、今日は、効かなかった。

その夜、規約を最初から読み返した。

外で会っても、他人であること。……他人は、耳を赤くしない。他人は、「今、作りました」なんて言わない。

条文の隙間にあの人の素顔が挟まって、抜けなくなっていた。

十年前の咬み痕

教えてくれたのは、サロンのオーナーだった。老婦人で、久遠を「玲」と呼ぶ、唯一の人。

「あの子の担当を受けたのね。……珍しいこともあるものだわ」

お茶に呼ばれた席で、彼女は静かに言った。

「玲がなぜ、番行為だけをあれほど禁じるか。聞いていないでしょう」

「規約だと、しか」

「十年前、あの子には恋人がいたの。Ωの子。……その子のヒートの夜に、玲は、理性を落とした」

湯呑みの中で、お茶が、揺れた。

「同意なく、噛んだ。番にしてしまった。αの本能というのは、そういうものよ。相手の子は、番の枷に三年苦しんで——最後は、自分の腺を焼いたわ。番を、切るために。体を壊して、あの子の前から消えた」

声も出なかった。

「玲は、探したの。三年かけて。謝るためじゃないわ。償える形がひとつでもないか、それだけのために。……見つけたときには、その子はもう遠い土地で、別の名前で暮らしていた。あの子は、会わずに帰ってきたのよ。自分

の顔を見せることさえ、加害だと思って」

「玲はそれから、二度と番を作らないと決めた。自分の本能を檻に入れる技術だけを、十年、磨き続けた。あの子の『支配』はね、欲望じゃないの。……罰よ。自分に科した、いちばん重い罰」

オーナーは、窓の外に目をやった。

「このサロンはね、七年前に、玲が持ち込んだ企画なの。Ωを棄漬けにしない訓練を作りたい、自分の技術を全部注ぐから、と。……最初は断ったのよ。αが本能の檻を教えるなんて、猛獣が檻の設計士になるようなものだもの」

「どうして、引き受けたんですか」

「設計士としては、猛獣がいちばん優秀だからよ。檻の弱いところを、全部知っているから」

湯呑みを置く音が、小さく鳴った。

「あの子はこの七年、何十人ものΩの波を鎮めてきたわ。誰にも触れず、誰も傷つけず、完璧に。……でもね、私は知っているの。完璧というのは、治った人の顔じゃない。まだ血が出ている人の、包帯の巻き方よ」

オーナーは、わたしをまっすぐ見た。

「九回断られたそうね。なぜだと思う？」

「……わたしが、審査に落ちたから」

「あの子が審査で落とすのはね、一種類だけ。——自分の檻を、壊しそうな

子だよ」

檻を叩く

オーナーの話を聞いてから、三日、眠りが浅かった。

罰として支配する人。跪かせることで、十年、跪いて詫び続けている人。
……あの完璧さの正体を知ってしまったら、もう、従うだけのsubには戻れなかった。

壊したいわけじゃない。ただ、檻の中にいるのが技術じゃなくて生身のあの
の人だと知って、確かめずにいられなくなった。

次のセッションで、わたしは、訊いてはいけないことを訊いた。

「久遠さんは、わたしを嘯みたくなったこと、ありますか」

部屋の空気が、止まった。

「……契約外の質問です」

「答えてください」

「桜庭さん」

「栞、です」

立ち上がって、あの人の前に立った。跪く側が、立った。それだけで、この部屋の秩序は、音を立てて軋んだ。

「九回、わたしを落としましたよね。壊されそうだったからですか。わたしに、檻を」

「——座りなさい」

「嫌です」

初めての、不服従だった。

久遠の目の色が、変わった。灰色の静かな目の、いちばん奥で、何かが、鎖を引いた。

「……もう一度だけ言います。座りなさい」

「嫌です」

次の瞬間、三歩の距離が、消えていた。

壁に、背中が押しつけられる。両側に腕が突かれて、檻の格子みたいに、わたしを囲った。いつも三歩向こうにあった顔が、息のかかる距離にある。

「九回」

声が、低かった。命令の声より、ずっと下から出ていた。

「九回落としたのは、会わないためだ。書類の名前を見るたび、二年前の夜の匂いがした。会えば、檻が保たないと、わかっていたから」

「……保たないと、どうなるんですか」

訊いてはいけない質問を、わたしはまた、した。

——体験版はここまでです。

この続きは、製品版でお楽しみください。

『水の支配人は番を作らない』

～跪かせる側のあの人が、「欲しい」と懇願するまで～

齋藤あいり

氷の支配人は番を作らない

～跪かせる側のあの人が、「欲しい」と懇願するまで～

著者 齋藤あいり

発行 二〇二六年七月

表紙・挿画 AI一部利用

X（旧Twitter） @NotHumanDesire

本作品の無断転載・複製・再配布を禁じます。 ©齋藤あいり